22

平安貴族社会にみる病気治療の諸相 2

坂本　陽子
順天堂大学大学院 医学研究科 博士課程

平安時代の貴族たちは，自分たちの体調不良や病気に対してどのように考え，どのように対処していたのだろうか．平安時代の貴族社会に関する歴史研究では主要史料として古記録が使用されてきた．そのなかでも，今回は平安時代中期に書かれた『小右記』を中心に当時の病気治療の在り方をみていく．

古記録とは，いわゆる当時の貴族たちの記した日記のことであるが，当時の日記は現代におけるものとは意味合いが少々異なっている．平安時代の貴族社会は，先例や慣習といった前代からの決まりごとを非常に重んじる社会であり，それらが彼らの生活および行動様式を支えていた．実際の記述を見てみると，前代に記された日記を手本に日ごろの政務や儀式に臨もうとする貴族たちの姿がしばしば見受けられる．このように，当時の日記は後の参考のためにその日の出来事を記録として残すという意味合いを持ち，後日・後世に読まれることを前提として，物事の子細を正確に記すことを意識し書かれたものといえる．なかでも『小右記』は，藤原実資（957–1046）が60年以上にも渡って書き続けた日記である．実資は，有職故実で有名な藤原北家小野宮流の人間として先例や儀式に聡く，貴族社会の中枢に身を置いていた人物であり，自らが日記に記すことの意味は多分に理解し意識していたと考えられる．

この『小右記』には宮中行事などの詳細はもちろん，実資自身のほかに藤原道長や頼通といった当時の主要人物たちが病気やけがをした際の様子なども記されている．こうした貴族たちの病気やけがに関する記述を『小右記』のなかにみていくと，病気・けがへの対処が不明なものも数多くあるが，対処方法は（1）医師が主体的に関わるいわゆる医薬的治療，（2）僧侶らが主導的に動き仏法の加護を求める方法，（3）占・祭祀・祓といった陰陽師が中心に行う方法の3つに大きく分類することができた．

（1）の医薬的治療の内容はなんらかの薬の服用に関するものが大半であった．毎回必ずしも医師の名が挙がっているわけではないが，医師が登場する場合には服薬指示を行っている．（2）の仏法の加護を得て治療を試みる方法は，対処が記された中では1番登場回数が多く，長和4（1015）年8月までの関連記事のなかでは40%近くを占めている．また，この対処方法は，病苦や不調の原因が記載されているなかで，それを邪気や霊気によるものと考えられた際に多く選択されている方法でもある．（3）の陰陽師の占や祓による対応において，ほかの2点と異なるものとしては吉凶占いがある．直接心身に異常がみられなくても，何か非日常的なできごとが起こった際には陰陽師が占い，それが病気と結びつけて考えられることがあったようである．また，これらの対処方法は単独ではなく併用されたケースも多くみられている．その内訳をみると，仏法の加護を得る方法と占・祓による対処法の併用が多く，医薬的治療との併用は少なめであった．こうした特徴は『小右記』の長和4（1015）年8月までの病気や治療に関連する記事にみられるものであるが，それ以降も病気治療に関する記事が多く散見している．なかには実資の病気治療に対する考え方の一端を窺わせる記述もあり，より多彩に当時の状況を物語っている．

今回はさらに長和4年9月以降の関連記事も含め，『小右記』全体における病気治療の詳細について検討を加えていく．